ある。本書所収の多くの論考が提供してくれた知識と知見を材料として、評者には上記のような議論が展開できた。それは残念ながら編者たちの企図した方向性とはかなり異なっているが、そうした異なった「風紀」の理解を示すことができたのも、本書を読んだおかげということができるだろう。願わくば、ここから「風紀」という概念をめぐって、より生産的な応答が展開されることを祈って、本稿の締めくくりとしたい。

＜参照文献＞
カント, イマヌエル 2014『純粋理性批判』下（石川文康訳）筑摩書房.
熊谷光久 2012『日本軍の精神教育――軍紀風紀の維持対策の発展』錦正社.
ケルゼン, ハンス 1971『一般国家学』（清宮四郎訳）岩波書店.
田中雅一・嶺崎寛子 2021「ジェンダー暴力とは何か？」田中雅一・嶺崎寛子（編）『ジェンダー暴力の人類学――家族・国家・ディアスポラ社会』昭和堂.
ダグラス, メアリ 2009『汚辱と禁忌』（塚本利明訳）筑摩書房.
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）2001『日本国語大辞典』第 2 版, 第 7 巻, 小学館.
バーガー, ピーター・L. 1979 (1967)『聖なる天蓋――神聖世界の社会学』（薗田稔訳）新曜社.
バーガー, ピーター・L., トーマス・ルックマン 1977 (1966)『日常世界の構成――アイデンティティと社会の弁証法』（山口節郎訳）新曜社.
フーコー, ミシェル 1977『監獄の誕生――監視と処罰』（田村俶訳）新潮社.
ミッチェル, ティモシー 2014『エジプトを植民地化する――博覧会世界と規律訓練的権力』（大塚和夫・赤堀雅幸訳）法政大学出版局.

（赤堀　雅幸　上智大学総合グローバル学部教授）

ガーズィー・ビン・ムハンマド王子（小杉泰・池端蕗子訳）『現代人のためのイスラーム入門――クルアーンからその真髄を解き明かす一二章』中央公論新社　2021 年　509 頁

本書は、現代のイスラーム思想家による明確なメッセージである。何を明らかにしているかと言えば、まずイスラームとは何かであり、次いでイスラームの現代的状況である。大部だが読み応えのある著作であり、そのメッセージは、ある意味、私たち日本人にとって「頼もしい」ものとなっている。

まずは、著者のガーズィー・ビン・ムハンマド王子について紹介したい（ここでの紹介は、巻末の訳者解説と訳者あとがきにほとんどすべて記されていることだが、本を実際に手にしていない人にとっては有用だろう）。

ガーズィー王子は預言者ムハンマドの血統を継承するヨルダン・ハーシム王国の王家の一員であり、現国王のいとこにあたる。高校はイギリスのハーロー校、大学はアメリカのプリンストン大学を卒業している。西洋文学に精通していることは、ケンブリッジ大学（イギリス）に提出した博士論文の題目が『恋に落ちるとは何か――恋に落ちることの文学的原型をめぐる考察、特に「ドン・キホーテ」「赤と黒」「ボヴァリー夫人」に着目して』であることから理解できるだろう。西洋のトップクラスの教育を受けたガーズィー王子であるが、その後、エジプトのアズハル大学大学院に学び、『クルアーンにおける愛』で博士号を取得している。『クルアーンにおける愛』はアラビア語で出版され、その後英語その他の言語にも翻訳されている。

このような経歴からして、ガーズィー王子は若い頃から西洋とイスラームの架け橋となることを周囲から期待されていただろうし、実際積極的にその役割を果たしてきた。重要なところでは、911 以降のムスリムとクリスチャンの関係悪化を対話によって改善しようと「共通のことば」イニシアティブ（2007 年）を先導し、さらに「国連世界諸宗教調和週間」の制定（2010 年）に尽力している。

また、イスラームの諸宗派間の相互承認を、500 人超の宗教学者の合意としてイスラーム世界全体に知ら

しめたことも大きな業績である。こちらは、宗派間の対立を緩和することを目指してのことである。イスラーム内部の対立こそが、ダーイシュ（IS, ISIL）の悪夢をもたらしたとするのが、本書の強調点の一つであるが、ここで展開されるイスラーム世界の現状認識には厳しいものがある。原著初版の刊行は2017年であり、つまり、ダーイシュが猛威を振るった時期に構想・執筆されたということである。グローバル化のもたらす危機的状況と常に対峙しつつ、著者が自らの思想を鍛えてきたことがうかがえよう。

『現代人のためのイスラーム入門』は、基本的には非ムスリムの読者に向けて書かれたものであるが、「ムスリムに向けてのメッセージ」ともなっている。この点が本書をユニークなものとしていることは、後で詳しく述べたい。

本書は以下の12章によって構成されている。

第1章　宗教とは何か
第2章　イスラームとは何か
第3章　あなたたちの主は誰か
第4章　なぜ神は人を創ったか
第5章　楽園と火獄とは何か
第6章　クルアーンとは何か
第7章　預言者ムハンマドとは誰か
第8章　心とは何か
第9章　俗世の生活とは何か
第10章　シャリーアとは何か
第11章　ジハードとは何か
第12章　政府とは何か

それぞれの章の冒頭には主題となるクルアーンの章句が置かれている。たとえば「第1章　宗教とは何か」の冒頭には、「これはまことに、いにしえの啓典の中にある」という至高者章18節が置かれている。この章句の意味を、著者はクルアーン、ハディース、そしてアラビア語に関する豊かな知識を駆使して解説していくのだが、それに加えて、西洋文学からの引用もあちこちに散りばめている（聖書からの引用もある）。本文が始まって2ページ目で、エミリー・ブロンテの詩を引用しつつ（ムスリムであるなしにかかわらず）人間の内奥には信仰への深い希求が存在すると述べている。

この点についてもう1か所例示すると、「第3章　あなたたちの主は誰か」では、ウィリアム・ブレイクの『経験の歌』（訳書では1974年となっているが、1794年が正しいと思われる）、ジャラールッディーン・ルーミー、クリスティーナ・ロセッティ、ヌールッディーン・ジャーミーを自在に引用しながら、愛についての議論を展開している。このように多彩な文学作品が登場することによって、西洋世界の読者はより親近感をもって読み進めることができるだろうし、ひいてはイスラームの教えの「普遍性」へと理解を深めていくことも可能となるだろう。

各章の最後には、「なぜこれを知ることが重要か」という節が置かれている。第1章では、宗教の目的として「根本的に他者を道徳的および精神的に『助ける』ことだ」と簡潔直截に述べている。さらに、社会生活のすべてを包括する「人生計画」である宗教が有する大きな力と、それゆえにこそ悪用された際に生じる「大きな危険」をも指摘する。

本書はなにぶんにも大部の著作であることから、章ごとに内容を要約するのではなく、ここからは、筆者自身の関心に沿って記していきたい。この本は、読者の置かれた状況に応じた多様な読みを可能とする内容を備えていることから、それは著者であるガーズィー王子の希望にも沿ったものであるはずである。

筆者は、月刊誌『第三文明』において、2016年から2021年にかけてムスリムとの4回の座談会を企画した。そのきっかけは、2016年7月にバングラデシュの首都ダッカで起きたレストラン襲撃事件である。武装したバングラデシュ人が、外国人が多く集まるレストランを襲い、その場で次々に殺害していったという凄

惨な事件である。

亡くなった20人の民間人の中に、JICAのプロジェクト関係者（コンサルタント会社）の日本人7人が含まれていたことから、この事件は日本人にも大きな衝撃をもたらした。「普通のムスリムとテロリストの区別がつかないから、ムスリムは日本から出て行ってほしい」「ムスリムは過激派をのさばらせている。違うと言うなら、自分たちでケリをつけろ」などといったネガティブなコメントが、ネット上に多数書きこまれた。

「バングラデシュで起きた事件の責任を、日本にいるムスリムに押しつけている。これは支離滅裂な意見だ」と感じる一方、これまでのように「一般の善良なムスリムとテロリストは違う」と語ることが、有効ではなくなっていることを筆者は強く感じた。実行犯の若者たちは、比較的裕福な家庭の出身で教育レベルも高かった。そのことから「テロが身近に迫ってきた」という感覚を多くの人が抱いていた。そのことを日本に住むムスリムの友人たちも同様に察知していた。そこで、ムスリムとの対話や協働が可能であると発信することを目的に、上述の座談会を行った。

第1回（『第三文明』683号）では、旧知の大塚モスク関係者の男性2名とバングラデシュ地域研究の専門家を招いて議論した。その内容は、事件が起きるまでのバングラデシュの近況（イスラーム過激派と目される犯行が増えていた）、ダーイシュに対してムスリムの宗教学者が発した反対声明、にもかかわらずダーイシュに若者が引き込まれる背景などである。

ここで指摘があったのは、中東において、「イスラームの敵」からムスリム同胞が抑圧され、自由を奪われているといった感情がムスリムの中にあるということである。ムスリムが平和を望んでいても、民主的な意見が通らない。そして、どんなに時間をかけても苦しむ同胞を助けられない。そうなると、暴力を使ってでも性急に現状を変えたいという人間が、とりわけ若者から、一握りであっても出てきてしまう。ダーイシュはそこに乗じてくるのだということである。

その後、第2回（699号）は「ムスリムの女性から見た日本社会」、第4回（737号）は「ムスリムの若者たちの今」と題して、母親の立場から見た子育ての問題を議論したり、日本で生まれ育った第二世代と意見交換を行ったりした。第3回（711号）は、「日本でも行われているシリア人によるシリア難民支援」を取り上げた。これは、ダッカの事件からしばらくすると、日本ではムスリムに対するネガティブな意見が（少なくとも表面上は）沈静化していったからである。第2回以降のテーマは、多文化共生が進む日本の現状に適ったものを選んでいったが、第二世代との対話は、とりわけ大きな知的刺激を与えてくれるものとなった。

最初の座談会のテーマは時宜にかなうものだったと思うが、十分に議論を尽くせたわけではなく、ヨーロッパからシリアに渡って戦ったり、ダッカでレストランを襲撃したりといった「若者が過激派に引き込まれる」現象については、その後もずっと気にかかっていた。『アラー世代』（アフマド・マンスール、晶文社、2016年）、『イスラーム思想を読みとく』（松山洋平、筑摩書房、2017年）、『ジハードと死』（オリヴェエ・ロワ、新評論、2019年）などを読んで、少しずつ理解を深めてきたつもりだが、本書において、イスラーム世界の中心部から力強いメッセージを受け取った気がする。

本書では、ダーイシュという「危機」について、多くの紙数を割いて正面から議論を展開している（とりわけ「第10章　シャリーアとは何か」と「付録　イスラーム国という危機」。後者は付録となっているが、実際には100ページ以上にわたるダーイシュに関する分析である）。

第10章では、シャリーア、すなわち神の啓示であるクルアーンと預言者ムハンマドに与えられた神の導きから発出する法について論じている。そして、実践におけるシャリーアの目的を、人間にとっての基本的権利（生きるための権利、信仰、家族・生殖・名誉、理性、財産）を保障するものとする。

この目的に向けてのムスリムの営為がイスラームの法学派の形成へと結実したのであり、以下、同章では法学派について詳しく論じている。結論から言うと、著者の立場は、以下の論理に則って、スンナ派の四大法学派に信頼を置くものとなっている。

それぞれの法学派は、クルアーンとハディースに基づきつつ、（たがいに異なりながらも）論理的で一貫した方法論に従って法規定を導き出している。そして、多くの優秀な学者たちがそれぞれの世代で、それらを検証し、考え抜き、適用し、発展させてきたことから、法学派とは、個人ではなく、方法論に従うものとなっている。さらに、方法論の違いは意見の違いを導き出すが、それぞれの法学派はたがいを尊重する多元的な態度を維持している。この部分の説明には、シャーフィイーの次の言葉が添えられている。「（我々は自

分たちの）学派が正しいと考えるが、それが誤りかもしれないことを認める。そして我々は他の法学派が誤りであると考えるが、それらが正しいかもしれないことを認める」（217ページ）。

ただし、著者によれば、多くのイスラーム学者には現代世界の文脈を深く理解するという努力が欠けている。彼らが現代世界における変化を適切な形で考慮に入れてこなかったために、法規定それ自体が正しくても、法の目的を達成しないという事態が生じているというのである。

四大法学派に信頼を置く一方で、ガーズィー王子はこれに敵対する「反ウスール運動」の淵源としてイブン・タイミーヤ（1328年没）を名指している。イブン・タイミーヤはクルアーンを文字通りに理解すべきであると主張し、ハディースを重視して「正しい初期世代」（＝サラフ・サーリフ。サラフィーという言葉の由来）の規範への回帰を訴えた。さらに、ハディースにない宗教実践は異端的な逸脱として非難した。それは学問的多元主義を認めず、個々の法学派の方法論の原則をも拒絶することを意味していた。

著者は、イブン・タイミーヤの思想から派生した運動を「反ウスール運動」と呼ぶ。そして、この運動はハディースの客観的な適用をしようとするものではなく、他の学派に敵対し、イブン・タイミーヤを無謬とみなす「第五の法学派」になっていると批判する。

反ウスール運動を特徴づけるものの一つに、他のムスリムに対する「タクフィール」（不信仰断罪）がある。イブン・タイミーヤはタクフィールを避けようとしていたが、彼の系譜を引く過激分子が、表面的な行動を理由に人々をひとまとめに非難し、さらに彼らを攻撃したり殺したりするようになったとする。

（本文で詳細に論じられている歴史的経緯については触れないが）20世紀における反ウスール運動には、二つの異なる潮流がある。一つは、サウディアラビアのサラフィー主義とワッハーブ派が一体となったものである。もう一つはムスリム同胞団である。この二つの潮流が重要なのは、この数十年の間に、伝統的な法学派の影響を「希釈」したことである。ムスリムの間における近代派（＝西洋の価値観を受け入れて、イスラームを更新するべきだと考える人々）の人口比は、現在でも1％程度にとどまり、20世紀初頭と変わっていないと著者は推定している。しかし、同じ期間に反ウスール派は1％未満から一割近くにまでその勢力を拡大するとともに、多数のムスリムの間に混乱状況をも生み出している。その結果、自分がどの法学派に属しているのか「わからない」というムスリムが、1％未満から現在では25％にまで増加していると著者は警鐘を鳴らす。

この間、ムスリムは関心と警戒心の欠如により、自分たちよりも熱意のある反ウスール派によってイスラームがハイジャックされるのを許してきた。クルアーンとスンナに基づき、利用可能なあらゆる手段を通じて指摘することで、タクフィール主義思想の誤りと欠陥を明らかにすべしと、著者はムスリムの学者を叱咤激励する。

第10章のまとめにおいて、ガーズィー王子は次のように指摘する。この部分はきわめて重要なので、以下に直接引用する。

> 最後に、おそらく今日の状況に最も関連することとして理解すべきことは、現代におけるイスラームの名の下の過激主義やテロリズムは、決して伝統的な法源学のイスラームに由来するものではなく、むしろ反ウスール運動に由来するということである。過激主義やテロリズムに関与する者たちが何と言おうと、それらはシャリーアの適用などではなく、シャリーアに関する混同である。これらは新しい現象であり、イスラームの1300年の歴史を通して理解された形のシャリーアとは相容れないものである。法源を知るムスリムであれば、決して過激主義やテロリズムを認めたり、それに関与したりすることはない。良心に照らしてそんなことはできないし、万が一そうしたいと思ったとしても、これらはイスラームに反するためにできない。テロリスト集団の中には、ウスール派も、アシュアリー神学派・マートゥリーディー神学派も、スーフィーもいない。これは決して偶然ではない。そして反ウスール主義者の中でも、ほんのわずかな割合の者たちだけが暴力的なテロリストになるが、すべての暴力的なテロリストは法源について無知であるか、反ウスール主義者かのどちらかである。シャリーアは生命への道なのであって、恐怖と破壊への道ではありえない。（263–264ページ）

最後に、12章までを読み終えたムスリムの読者に対して、自分の中に反ウスール的な傾向がないかと、

著者は三つの問いを投げかけている（補論II）。

まず、自分の宗教的意見が絶対的に正しいと思っていないか？　自分の意見が正しい→意見を異にする人は間違っている→ムスリムではなく、共存不可能→火獄に落とされるという視野狭窄に陥っていないかという問いである。

次に、ムスリム多数派の国の一員の場合。国法のすべてがシャリーアに立脚していなければ、それは不信仰の国家であり、そこで働く人々も不信仰者だと判断し、殺害することも正当だと判断するのかとの問いである。

三つめは、ムスリムが多数派ではない国の一員の場合。その国において、信教の自由を享受している場合でも、自分はその国の法（人が定めた法）に従う義務はないと考えるのか？　そして、その国が世界のどこかのムスリムたちと戦争状態にある場合、あなたがその国の人々に対して武力を行使することを是とするのか？

以上の三つの問いにおいて、答えが一つでもイエスであれば、あなたは反ウスール主義の過激な一部となっていると、著者は指摘する。ムスリムの読者に対して、自分の考えや行動をふりかえる機会を提供しているのである。

以上の紹介を通して、本書が「読み応えのある著作であり、そのメッセージは、ある意味、私たち日本人にとって『頼もしい』ものとなっている」という冒頭の文章の意味を理解していただけたのではないかと思う。ガーズィー王子の議論は、一貫して伝統的な法学派に根差しつつ、多元的な未来を志向するものとなっている。その姿勢は、多くのムスリムとムスリムとの共生を模索する人々の共感と信頼を得るに値するものであろう。希望を示してくれたと言ってもよいかもしれない。

筆者は国際学部で教鞭をとっているが、近年は留学生や日本生まれのムスリム学生が増加の一途をたどっている。彼ら彼女らと一緒に、イフタール・パーティーや大塚モスクが創設した小学校との運動会を行ってきたが、本書を読んで、これまで以上にそれらの活動に励んで行こうという気持ちが沸きあがってきたことを記して、この書評を終えることにしたい。

（子島　進　東洋大学国際学部教授）

池端蕗子『宗教復興と国際政治――ヨルダンとイスラーム協力機構の挑戦』晃洋書房　2021年　iii＋247頁

本書は中東の立憲君主国ヨルダンを主要なるアクターとしながら、同国の国際的な役割や他のイスラーム諸国家との関係だけでなく、キリスト教会、特にバチカンと宗教的な交流や関係についても論じられており、宗教と国際政治研究としての価値が高い。特に2021年8月中下旬以降、アフガニスタンからの米軍撤退とタリバン政権に対する日本を含む欧米諸国の強い警戒心や9.11、本書を読むことでイスラームとは何かの理解を深めることが可能であり、その学術的な研究として大いに評価される。

評者の専門はイスラームではなく、バチカンなどのカトリックやその他プロテスタント教会、特にアメリカの福音派などキリスト教と政治の関係であることを最初に断っておきたい。イスラームについては、キリスト教会との交流や逆に対立という文脈では関心はあるが、イスラームについては極めて無知である。そのため本著の評者として相応しいのかと疑問に思うものの、宗教は異なるものの本書の筆者との研究関心が極めて近いのも事実である。僭越ながら拙著『バチカンと国際政治――宗教と国際機構の交錯』のイスラーム教版と、本著を位置づけることが可能であるなら、評者としての資格があるとなるのであろう。

ヨルダンについての評者の知識は、イギリスの委任統治を受けた半植民地で、その対中東三枚舌外交の対象であり、戦後独立後も国王は英国で学ぶなど親英的、しかしそうした親欧米的であることから、多数派がイスラーム教徒の国民から反発を受けることがあるという程度のものであった。また本著の中心的なアクターである現ヨルダン国王アブドゥッラー2世の父親である先代の国王フセイン1世の、伝記的な学術書（本書の英語文献に記載されている）の著者ナイジェル・アシュトンと評者はたまたま知人であり、この著書